

あの戦争を語り継ぐ
平和宣言都市
30周年記念連載⑤

山本庸雄さん 90歳

南山地区在住

青春の記憶

私は昭和16年、高等小学校を卒業した14歳の時に国策に従って満洲（中国東北部）へ開拓に赴きました。荒涼とした宿舎で、ほとんど報酬もなく、食事も一汁一飯でたまに二菜が加われはご馳走でした。今思えば不自由を不自由と思わない生活に慣らされ、耐えられたのは、農山村の純情無心な少年だったからでしょう。昭和20年5月に兵役に就きましたが、軍はすでに小銃さえ一人二丁もない状態で

した。終戦後、ソ連軍に武装解除され捕虜となりました。私たちを乗せた貨物列車は奉天（現在の瀋陽市に相当）を出て約1カ月走り続け、同年10月中旬頃、カザフスタン共和国カラガンダの収容所へ到着しました。私が従事したのは炭坑作業でした。当時石炭は黒ダイヤと呼ばれ、炭坑労働は優遇されていました。厳寒酷暑の地上作業に比べ、炭坑の中は夏涼しく冬暖かいので恵まれていたといえるでしょう。元抑留者の方と話すとうらやましがられました。それでも落盤事故で亡くなった同僚や友人もいましたし、体力の弱い人は別の軽作業収容所に移って行きましたが生死のほどは分かりません。私などは最も

若く、炭坑作業も不自由な収容所生活もそれほどの苦痛を感じることはありませんでした。また、運動会や演芸会などもあり、そんなに暗い雰囲気ではありませんでした。健康はこの世界でも生き残るための必須条件と思いました。昭和24年10月に4年間の捕虜生活を経てナホトカから舞鶴経由で帰郷しました。

◆シベリア抑留 第二次世界大戦でソ連軍が侵攻・占領した満州において、終戦後武装解除し投降した日本軍捕虜および民間人らを主にシベリアやモンゴルに移送隔離して強制労働させ、約5万5千人の方が亡くなった。

※体験談を募集しています。

■ 企画政策課男女共同参画室内線 3354